

山古志における通い耕作という暮らし方とその可能性 －通い耕作と通いやーコンづくりの実態調査の報告－

プロジェクト2 客員研究員
一級建築士
仁瓶 俊介
立教大学観光学部
清野 隆

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

長岡市山古志地域（旧山古志村）は、2004年10月23日に発生した新潟県中越地震によって甚大な被害を受け、住民は全村避難、避難所生活、仮設住宅での生活を余儀なくされました。また棚池、棚田、畑等にも大きな被害を受け、代々受け継がれてきた農地での営農にも困難がもたらされました。山古志地域の復旧・復興が進み、2007年4月に避難指示が解除されると、条件の整った人々は帰村し、農地を修復し、徐々に営農を開始しています。しかし、山古志地域では農業の担い手が不足している状況です。また、耕作放棄地も少なくありませんし、今後さらに増加することが予想されます。このような状況を踏まえて、私たち地域産業研究グループは多様な主体による農地の維持管理の可能性について議論しています^{注1)}。クラインガルテンやダーチャといった市民農園の設置、生産法人・組合による耕作の代行などの実現可能性を検討してきました。山古志地域の現況を把握し、議論を重ねていく中で、私たちは地震後に山古志地域外に転居^{注2)}した旧村民が山古志地域に通い、耕作を続けていることを知りました。様々な理由により山古志地域から転居せざるを得なかった人々は、耕作、業務、勤務、地域内行事参加、地域内イベント運営、知人宅訪問、ヤーコンづくりなどを目的に現在も山古志地域に足を運んでいます。

本報告では、山古志地域に通い、耕作を行なっている旧村民（以下、通い耕作、通い耕作者と表記します）へのヒアリング調査と通いやーコンづくり者への取材結果を報告し、山古志地域における通い耕作の実態を明らかにします。また、通い耕作の実態を踏まえて、今後の山古志地域における集落空間の維持管理について考察を加えます。

(2) 調査の概要

1) 通い耕作者へのヒアリング調査の概要

2009年8月に、地域産業グループは山古志地域外に転居した旧村民で山古志地域内の農地に通って農業を継続している人々へのヒアリング調査を行いました。通い耕作者4人、通い耕作者の家族1人を対象に実施し、通い耕作の実態と通い耕作に対する意識について質問しました。調査の概要を表1に示します。

2) 通いやーコンづくり者への取材の概要

2008年度から3ヶ年にわたり、通いやーコンづくり者へ取材を続けてきました。通い耕作者と同様に転居したうえ山古志地域内の農地に通っている人々ですが、借地した畑でヤーコンづくりを行っています。筆者は断続的でしたが作業に参加しながら取材しました。また上記の通い者の居住する住宅地視察、所属するグルー

表1 通い耕作者へのヒアリング調査の概要

日時	・2009年8 / 24 (月) 午前
場所	・長岡市役所山古志支所会議室, 太田コミュニティセンター
回答者	・山古志地域への通い耕作者: 4名 ・通い耕作者の家族: 1名 ・1人あたり1時間程度ののべ4時間程度)
質問内容	<p>【フェースデータ】(2009年8月当時)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・耕作者の現在の居住地、および旧居住地 ・家族構成 <p>【実態】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農地の耕作面積(作目) ・通う頻度・時間 ・通い耕作時の拠点 ・共同作業、営農組合への参加 <p>【意識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通い耕作をはじめた動機 ・営農組合への関心 ・今後の通い耕作の継続 ・通い耕作における課題

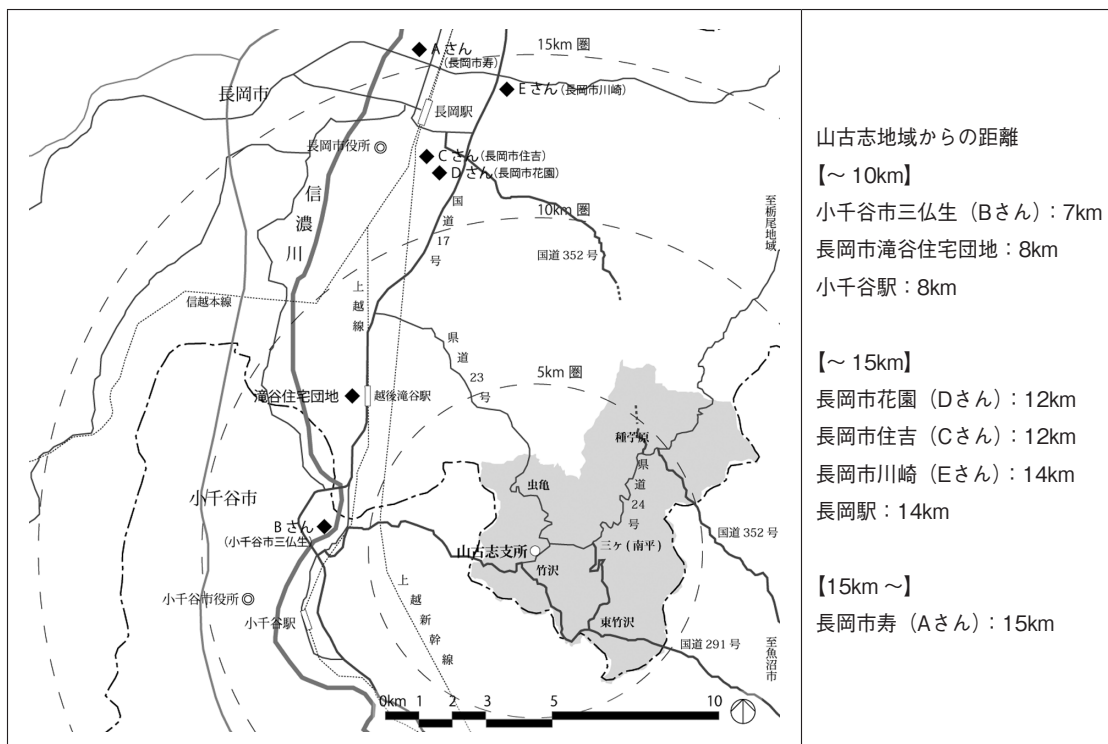
プの人との面談なども含めた取材としています。対象はヤーコンづくり者の3人、2007年度に取材したその他の通い者の1人となっています、取材結果の報告では個人情報保護に配慮している点をご確認ください。

(3) 山古志地域へのアクセス

図1に山古志地域と周辺部の位置関係を示しました。山古志地域周辺の主要な市街地である長岡駅周辺は15km圏内、小千谷駅周辺は10km圏内に位置します。山古志地域にアクセスする経路は、長岡市から県道23号を利用する経路、小千谷市から国道291号を利用する経路、魚沼市から国道291号を利用して中山隧道を通過する経路、長岡市栃尾地域から県道24号を利用する経路の4つがあります。以上の4経路のうち主要な経路は長岡市と小千谷市からアクセスする経路です。長岡駅から山古志地域までの道のりは20km弱、車で約40分を要します。

また図1には、本稿に登場する7人の通い耕作者の居住地を記しました。7人の通い耕作者の居住地と山古志地域との距離は、小千谷市三仏生(Bさん宅)から約7km、長岡市滝谷住宅団地(Fさん宅、Hさん宅)から約8km、長岡市花園(Dさん宅)、長岡市住吉(Cさん宅)

図1 山古志地域と周辺部との距離



から約12km、長岡市川崎（Eさん宅）から約14km、長岡市寿（Aさん宅）から約15kmとなります。7人の通い耕作者たちは、長岡市、小千谷市の市街地に居住しつつ、山古志地域に通い耕作をしていることがわかります。

2. 通い耕作者へのヒアリング調査

本章では、前述した通い耕作者5人へのヒアリングに基づいて、通い耕作の実態について報告します。表2にヒアリング調査の結果を整理しました。なお、2章で記した内容は2009年8月のヒアリング調査当時の情報です。

(1) Aさんの通い耕作

Aさん（男性・74歳）は長岡市寿の戸建て住宅に夫婦2人で住んでいます。地震前は山古志地域の種苧原に住んでいましたが、地震後に子供から長岡に出てきたらどうかと話を持ち掛けられ、現在の住まいに転居しました。2人の子供は長岡市内に在住しています。7年前まで山古志地域の土建会社で働いていましたが、現在は年金で生計を立てています。Aさんの通い耕作歴は3年を数えます。山古志への通い耕作を始めた理由は、退職して仕事になかったからだそうです。また、地震による被害を免れた農耕機械をそのままにしておくのはもったいないと感じたことも理由の1つだそうです。Aさんは山古志地域の農地で米と野菜を栽培しています。現在の居住地から山古志地域の種苧原まで車で45分を要します。旧宅から車で10分の距離に水田が3箇所に分かれて計6枚あります。地震以前は、約3倍の1haを耕作していましたが、地震で水田80aが崩落しました。通い始めた当初は20aを耕作していたそうですが、徐々に耕作する面積を増やし、現在では25aを耕作しています。旧宅近くに小規模な畑があり、野菜を栽培しています。Aさんは週2回山古志地域に通い、農作業をしています。農作業をするのはAさんだけですが、山古志地域には夫婦2人で通っています。1日あたりの滞在時

間は半日で、除草や畔の草刈りをします。時には1日に2回通うこともあります。田植えや稲刈りの繁忙期には2人の子供も手伝います。中山間地域の集落での農作業に欠かせない共同作業について話を伺ったところ、Aさんは20、30人の仲間と道普請をしているそうです。仲間の中にAさんのような通い耕作者は3人います。以前、Aさんは営農組合に参加していましたが、転居をきっかけに組合に参加していません。Aさんは通い耕作時に旧宅の作業小屋を拠点としています。農作業に必要な道具や農耕機械、着替えの衣類などを作業小屋に置いています。通い耕作時には、弁当やお茶を持参し、旧宅で食べます。昼寝するときもあるそうです。

最後に、通い耕作について今後の意向を尋ねたところ、「後1年ぐらいしか続けられないだろう」と話していました。また、「1haでは採算が合わないの、子供の子代まで続けることは難しい」けれども、「息子に受け継いでもらえるのが一番良い」と考えています。一方で、「生産組合に耕作を依頼する」、「農地を買い上げてもらう」という解決策も考えています。

Aさんから話を伺っていると、Aさんの山古志地域への想いが伝わってきます。Aさんは「山古志に住んでいる親戚や友人がお茶に誘ってくれる」ことを話していました。また、「地震がなければ、山古志に住み続けていた」、「山古志の夢をみる」と話します。現在の住んでいる地域の年中行事に参加しており、山古志地域の年中行事には参加していません。山古志地域から声がかからないことがさびしいといえます。上述のような動機やきっかけが通い耕作の背景にあるのは事実ですが、山古志地域へ通うことが通い耕作の動機付けになっていると感じました。

(2) Bさんの通い耕作

Bさん（男性・61才）は地震以前、池谷集落に住んでいました。地震後「山古志に帰るつもりだった」そうですが、同世代と若い世代の住民が次々に転出してしまい、Bさんも転出を考え始めたそうです。最終的には、

子供と相談した結果、山古志地域からの転居を決意しました。現在は、小千谷市三仏生にBさん夫婦、Bさんの母、妻方の両親の5人で生活しています。2人の子供は小千谷市と東京に住んでいます。Bさんは高校卒業後に農業を始め、1haの農地で米を生産し、牛を20頭飼っていました。一旦は長岡市で外装業を営み、引退後に農業を再開しました。農業で第2の人生を過ごしたいと話します。2010年から仲間と小千谷市で農地を借りて野菜（ナス・かぐら南蛮）を栽培する計画があります。野菜は販売目的で栽培し、既にその販路を確保しています。山古志地域内の農地は小千谷市の住まいから車で15分の距離にあります。Bさんは山古志地域の農地で米とゼンマイを生産・栽培しています。ゼンマイの栽培は今年から始めました。水田は全部で5枚、面積にすると50aを耕作しています。ゼンマイの畑は30aです。山古志地域内の農地のほか、地震後に小千谷市の現在の自宅の近くに水田と畑を約10a購入し、米と野菜を栽培しています。その畑では、Bさんの妻が野菜づくりをしています。Bさん世帯で山古志地域への通い耕作をしているのはBさんのみです。Bさんは毎日山古志地域に通い、終日を過ごします。水管理なども含めて、地震以前と同じ作業を行なっています。共同作業に関しては、しめなわのみに参加しています。道普請や盆踊りなどの山古志地域の年中行事には参加しておらず、「できれば参加したい。声がかからないのはせつない」と話していました。一方、Bさんは営農組合に加入しています。山古志地域内の農地の稲刈りは営農組合に委託しています。個人で全ての農作業をこなすのは大変なので、営農組合ができて良かったといいます。他方、組合の中で若手世代にあたるBさんは農耕機械のオペレーターとして働いてほしいといわれています。また、他の人から農地を請け負ってほしいといわれることもあります。「米価が安く、米作りには積極的にはなれない」と話していました。池谷集落には、Bさんの他に2人の通い耕作者がいることもわかりました。

Bさんは、通い耕作時の拠点として、地震後に残った車庫を利用し、農耕機械などをしまっています。旧宅

は地震により全壊したため、取り壊しました。山古志地域に滞在する時には、土木工事現場の仮設トイレなどを利用します。前述のように、Bさんは農地を増やし、規模を拡大して農業を営もうとしています。今後も通い耕作を続けますかと質問すると、「まだ10年は続けたい」と通い耕作への意欲を話していました。

(3) Cさんの通い耕作

Cさん（男性・58才）は長岡市住吉から山古志地域へ通っています。転居以前は、虫亀集落に住まいがありました。現在は夫婦2人で生活しており、2人の子供は同じ長岡市内に住んでいます。仮設住宅で暮らした後、Cさんは山古志地域へ帰るつもりだったそうですが、家族で相談した結果、長岡市の市街地に転居することを決意しました。Cさんは毎日山古志地域に通っています。主な目的は養鯉の作業で、平日は仕事後に2時間滞在します。休日は朝から夕方まで滞在します。Cさんは農協で35年働いた後、現在の職業に転職し、養鯉業を始めました。山古志地域で鯉のある人生を選択しました。仮設住宅で生活している時から、養鯉を再開しようと考えていたそうです。耕作については、水田で米、畑でナス、トマト、キュウリなどの野菜を栽培しています。面積は水田23a、畑5a、養鯉池50aです。養鯉池は水田を転用したもので、うち30aは借りています。これらの農地は現在の住まいから車で20から25分の距離にあります。農地のある虫亀集落には湿田が多く、地震後の農地の修復がとても難しかったそうです。また、Cさんは現在の自宅の周りでキュウリ、ナスなどの野菜や花を栽培しています。以上のような通い耕作は、日常的にはCさんが1人で行なっています。田植えと稲刈り、養鯉の選別といった人手を要する作業の時には、Cさんの子供が手伝っています。小規模な水田にはコンバインが入らないため、手間がかかり、人手が必要です。Cさんは旧居住地の共同作業に参加しています。区費を納めていて、集落の盆踊りなどの年中行事にも参加しているそうです。また、Cさんは山古志地域の直売所を

利用します。山古志地域の直売所は集落のサロンといわれますが、Cさんもサロンに通う1人です。Cさんは旧宅の玄関部分を通い耕作時の拠点として利用しています。中越地震により、旧宅は玄関以外のほぼ全てが壊れました。残された玄関部分は6、7人で休憩できる広さがあります。さらに、仮設のトイレを新たに設置しました。本当はお風呂も設置したいそうですが、費用がかかるので難しいそうです。トラクター、耕うん機、コンバインなどの農耕機械は地震の被害を免れ、旧宅の車庫にしまっています。

Cさんは「自分が70才になるまでは（農業を）続けたい」と話しますが、「次の世代までは続かない」と考えています。子供が継がない場合、誰かに耕作を続けてほしいと考えており、「外から来る人でもいい」と柔軟な意見を持っています。

（4）Dさんの通い耕作

Dさん（男性・77才）は長岡市花園で戸建て住宅に住んでいます。地震直後の2004年12月に中古の住宅を購入し、家族全員で転居しました。仮設住宅には入居しませんでした。現在は夫婦、娘夫婦、孫と一緒に住んでいます。このほか、子供1人が新潟に住んでいます。旧宅は大久保集落でした。週1、2日を除いて、Dさんは山古志地域に通っています。朝8時に長岡市花園の自宅を出て、8時半には大久保集落に到着します。自宅から車で25から30分の距離に農地があります。夕方5時までの終日、水周りなどの農作業をします。弁当を持参し、昼寝をするなどのんびりとした時間を過ごします。山古志地域に通い始めた動機を尋ねたところ、「長岡市内にいてもすることがない」、山古志地域に来る方が「健康のためになるし、いままでの仕事を続けることができる」と話していました。Dさんの妻は大久保集落の出身で、月2、3回、Dさんと一緒に大久保集落を訪れます。

地震以前は4枚、24aの水田をDさんは管理していました。地震による被害は少なかったそうですが、水田の畔が傾き、水田の上の斜面が崩れたため、当時は現在

のように復興できると考えていなかったそうです。水田の管理には手間がかかります。秋には水田を維持するための2つのため池のまわりを土で固める作業もあります。年間の米の収穫量は15俵前後で、農協には出荷せず、家族で消費する分と親類に送る分になります。また、農地の一部を畑にして、キャベツ、里芋などを栽培しています。畑の管理はDさんの妻が月に2、3回します。この他、現在の長岡市の住まいの近くの1.3aの畑をDさんの妻が管理しています。すいか、蕪菜、カボチャなど、いろいろな種類の野菜をつくっています。地震以前は、養鯉をしていましたが、越冬施設が倒壊したため、再開できなかったそうです。

Dさんは春とお盆に行なわれる道普請と草刈りといった共同作業に参加しています。現在でも大久保集落の人たちとの付き合いがあり、ゲートボールをしながらお茶を飲みます。Dさんのように転居した人たちも大久保集落の行事に参加しているそうです。Dさんによれば、大久保集落では10世帯が転居し、うち6世帯が通い耕作をしています。Dさんは「町の生活はよくない。…ただ、山で1人で生活するわけにもいかない」と言い、現在の住まいと山古志との違いに戸惑っているそうです。

Dさんの旧宅は中越地震で全壊しましたが、作業小屋は残りました。作業小屋は壊れかけていたため、改修して使っている状況です。「作業小屋がなかったら、大久保集落に来ることができない」とDさんは話します。作業小屋には耕うん機、トラクター等を保管しており、休むことができる部屋もあります。1年に4回、作業小屋の除雪をしています。今後の通い耕作について、Dさんは「あと何年まで農業をやるということではなくて、半年ぐらいつの期間で考えて」います。引退後に若い世代に農地を譲ることや売買することに対しては消極的です。「先祖のものだから残して行きたい」と考えていますが、「自分ができなくなったときは、田圃も自分も終わりだろうと思っている」、「もし山古志に住まいがあれば、自分が生きている間はずっとできる」と話しています。

（5）Eさんの通い耕作

Eさんの通い耕作については、Eさんの子供から話を伺いました。Eさんは長岡市川崎に夫婦2人で暮らしています。地震以前は竹沢集落に住んでいましたが、地震時に自宅は全壊しました。一時的に仮設住宅に入居し、空き家になっていたEさんの子供の住まいに転居しました。以前は毎日山古志地域に通っていましたが、農地までの車の運転が大変になったため、寝泊まりできる小屋を建てたそうです。作業小屋は8畳の広さで風呂とトイレがついており、夏場は週に3日泊まることもできます。管理している農地は水田2枚で、地震前の半分になったそうです。以前は水田4枚で15俵くらいの収穫があり、家族が食べる分、親戚に送る分に充てていました。現在は10aの農地で米と野菜を栽培しています。水田の稲刈りは委託しています。Eさんは村仕事、道の修繕といった共同作業に参加しています。区会に入り、区費を納めており、作業や行事があるときには連絡をもらっています。本人は「車を運転できるうちは山古志に通いたいのではないか」とEさんの子供が話してくれました。また、Eさんの子供は「自分としては田圃が少しでもいいから残ってほしい」と考えています。

（6）まとめ

最後に、5人の通い耕作者へのヒアリング調査の結果から山古志地域における通い耕作の特徴についてまとめます。まず、通い耕作を始めたきっかけとして、農地の被害が少なかったこと、機械が残っていたことが挙げられます。5人の通い耕作者の場合、少なくとも山古志地域で農業を再開できる条件が整っていたといえます。農地や機械を失ってしまった場合には通い耕作は成立しにくく、営農意欲はあるけれど耕作を実現できなかった人々の存在が想像されます。

次に、通い耕作の動機については大きく2つの傾向を読み取ることができます。1つは営農への意欲、農的営みのある生活への回帰の意欲です。5人は地震以前と同

じように耕作することを望み、通い耕作を始めました。また、新しい居住地やその周辺で耕作している様子からも日常生活における農的営みの重要性がわかります。なかでもBさんとCさんは農業や養鯉がこれからの人生に明確に位置づけられていました。もう1つは山古志地域に通うことです。通い耕作とは、自宅と農地の間を往復し、日々の農作業を坦々と営むものではありません。以前居住していた集落の共同作業に参加し、仲間のお茶飲みやレクリエーションにも参加することも通い耕作の大事な要素です。こういった共同する楽しみが、山古志地域に通い、耕作する動機の1つになっていました。

今後の通い耕作の継続については、全員が可能な限り続けたいと考えています。が、同時に子供の世代まで続けることは難しいといえます。5人という少ないサンプルですが、高齢であるほど、山古志地域に通う頻度が少なくなる傾向にあります。農地の次世代への継承の問題は深刻で、今後は耕作放棄地が急速に増えていくことが予想されます。そのため、農地を維持するためには、担い手の転換も検討しなければなりません。今回の調査から通い耕作者の子供世代が田植えや稲刈りに参加していることがわかりました。通い耕作者たちの考えとはことなりますが、通い耕作者の第2世代がこれからの農地の維持管理の担い手として期待されます。

表2 通い耕作者へのヒアリング調査の結果

	通い耕作者の属性	通い耕作の実態		今後の意向	
Aさん	<p>【家族構成】妻、子供2人 【現在の住まい】長岡市寿 ・戸建住宅で夫婦2人。 ・以前は種芋原に居住。現在の住まいから車で45分。 ・息子は共に長岡市在住で、距離も近い 【転居のきっかけ】 ・地震後に子供から山古志から出たらどうかと相談された</p>	<p>【通い耕作者】：本人のみ ・田植えと稲刈りのみ長男と次男が手伝い 【通う頻度】：週2回 【滞在時間】：半日滞在 ・弁当、お茶を持っていき、自宅で食べる。昼寝もする 【作業】：除草、畦の草刈など 【動機】：仕事がないから。残った機械がもったいないから。</p>	<p>【農地】：水田1ha ・旧来の3分の1。当初は20aで徐々に増やしてきた。 ・旧宅から車で10分の距離 ・旧宅近くに小規模な畑 【作目】：米、野菜 【拠点】：旧宅の作業小屋 ・農耕機械、道具、衣類などを置いている。</p>	<p>【共同作業】 ・道普請に参加している。 ・以前は営農組合に参加していたが、現在は参加していない。 【営農組合】 ・加入している。 ・稲刈りを委託している。 ・オペレーターとしての役割を期待されている。</p>	<p>【今後について】 ・あと1年ぐらいいしか続けられないと感じている。 ・子供の世代まで続かない。1町歩では採算が合わない。息子に受け継いでもらえるのが一番良い。 ・生産組合に頼むしかない。もしくは、農地を買ってもらえればよいけれど、難しそう。</p>
Bさん	<p>【家族構成】妻、子供2人 【現在の住まい】小千谷市三仏生 ・戸建住宅（Bさん夫婦、Bさん母、妻方の両親） ・以前は池谷で居住。 ・子供は東京、小千谷在住。 【転居のきっかけ】 ・同世代、若い世代が転出したことがきっかけとなり、子供と相談した結果、転居した。</p>	<p>【通い耕作者】：本人のみ ・小千谷市の自宅近くの畑にはBさんの妻が耕作している。 【通う頻度】：ほぼ毎日 【滞在時間】：ほぼ終日 【作業】：水管理など ・地震以前とかわらない。 【動機】：外装業の引退後に農業をしようと考えていた。</p>	<p>【農地】：水田50a、畑30a ・今年からゼンマイを栽培 ・小千谷から車で15分の距離 【作目】：米、ゼンマイ 【拠点】：車庫</p>	<p>【共同作業】 ・しめなわに参加している。 ・道普請には参加していない。 【営農組合】 ・加入している。 ・稲刈りを委託している。 ・オペレーターとしての役割を期待されている。</p>	<p>【今後の通い耕作について】 ・今後10年は続けたい。 ・来年から仲間と一緒に小千谷市内の畑を借りて、野菜を栽培する予定。</p>
Cさん	<p>【家族構成】妻、子供3人 ・子供は長岡市在住 【現在の住まい】長岡市住吉 ・戸建て住宅で夫婦2人暮らし ・虫亀まで車で25分の距離 【転居のきっかけ】 ・仮設住宅で生活しており、帰村を考えていたが、家族と相談して転居を決定した。</p>	<p>【通い耕作者】：本人のみ ・田植え、稲刈り、養鯉の選別の時のみ、息子が手伝う 【通う頻度・滞在時間】 ・ほぼ毎日。仕事後は2時間・休日は朝から夕方まで。通いは養鯉がメインで、仕事は2時間ほど滞在中。 【動機】 ・長岡にいてもつまらない。やはり生まれたところがいい。現在のところではお茶飲みもない。</p>	<p>【農地】水田、畑、養鯉池 ・水田（23a）が1ヶ所に3枚。車で20～25分の距離。 ・畑（5a）で野菜を栽培。 ・養鯉（50a）が3ヶ所に15、6枚。水田を転用した。 【作目】：米、ナス、キュウリなど 【拠点】：旧宅の玄関部分 ・6～7人で休憩できる広さ。 ・仮設トイレを設置。 ・トラクター、耕うん機、バインダーは車庫に置いている</p>	<p>【共同作業】 ・共同作業と盆踊りに参加している。 ・区費を納めている。 ・水田耕作の受託は考えていない。稲刈りが大変で手一杯。収穫後に利用する設備にも限りがある。養鯉なら考える。</p>	<p>【今後について】 ・70歳になるまで続けたい ・次の世代まで続かないと思う ・子供が受け継がない場合は、誰かに代行してもらいたい ・外から来る人でもよいと思う。荒れ地しておくよりいい。 ・養鯉は好きでないと続かない仕事なので、現在興味の無い息子が引き継ぐのは難しいと考えている。</p>
Dさん	<p>【家族構成】妻、子供2人、孫 ・娘は同居しており、働いていて、妻が孫の面倒をみている。 ・息子は新潟にいる。 【現在の住まい】長岡市花園 ・戸建住宅。中古の住宅を震災後の12月中旬に購入。仮設住宅にははいていない。 ・大久保まで車で25～30分。</p>	<p>【通い耕作者】：本人、妻 【通う頻度】：ほぼ毎日 ・朝8時に家をでて、8時半に到着。夕方五時まで田圃の水周りなどをする。弁当をもってきて、昼寝をしたりのんびりゆったり過ごしている。 【滞在時間】：ほぼ終日 【作業】：田圃の水周りなど 【動機】 ・長岡市内にいたってすることはない。ここにきていたほうが健康のためになるし、いままでの仕事を続けることができる。</p>	<p>【農地】：水田、畑 ・以前は水田4枚（24a）。畑では月2回、Dさんの妻が耕作している。 【作目】：米、キャベツ、里芋など ・とれた米は農協にはださないので、親類におくっている。 【拠点】：作業小屋（3×3間） ・地震で壊れかけた作業小屋を改造し、耕うん機とトラクターを保管。休むこともできる。 ・自分にとって大切なもの。なければ大久保に來れない。</p>	<p>【共同作業】 ・お盆と春の道普請や草刈りには参加している。 ・いまでも大久保のひとつの付き合いはある。ゲートポールをやっている。外にでたひとたちも参加している。たのしみで、お茶も出してもらえる。</p>	<p>【今後について】 ・半年ぐらいつづの期間で考えている。車で通っているのだが、やはり通いは大変。山古志に住まいがあれば、自分が生きている間ずっとできるが。 ・いずれ手放すことになる ・先祖のものだから残したい ・誰かに譲ったり、売買するのはやりたくない。若い人たちに譲ろうとは考えていない。 ・自分ができなくなったときは田圃も自分も終わりだと思ふ。</p>
Eさん	<p>【現在の住まい】長岡市川崎 ・夫婦2人で住んでいる ・旧居住地は竹沢 【転居のきっかけ】 ・仮設住宅で暮らしていて、山古志に戻るかどうかが悩んでいた。ちょうど、姉の家が空いていたので、そこに移り住んだ。</p>	<p>【通い耕作者】：本人のみ 【通う頻度】 ・最初は毎日通っていた。 ・運転が負担になってしまっていたので、小屋をたてて、そこで泊まっている。 【作業】：水管理など ・地震以前とかわらない。 【動機】：外装業の引退後に農業をしようと考えていた。</p>	<p>【農地】 ・全部で100aくらいで、何か所かにわかれている。 ・震災以前は、水田4枚、養鯉池1～2枚。 ・半分は養鯉業者に売り、半分は貸している。 【作目】：米、野菜 ・震災以前は、15俵くらい収穫。自分たちで食べるものと、親せきに配っていた。 【拠点】：小屋を新設 ・広さ8畳で風呂やトイレがついていて宿泊できる。</p>	<p>【共同作業】 ・村仕事はしている。区会には入れてもらっていて、区費をおさめている。なにかあるときには知らせてもらっている。また、道の修繕にも参加している。 ・田圃の刈り取りは委託している。</p>	<p>【今後について】 ・父親が車に乗れるうちは、山古志にきたいと思っっているのではない。 ・自分（Eさんの子供）としては田圃がすこしでもいいからのこってほしいとおもっている。</p>

3. 通いやーコンづくり者への取材

本章においては、通いやーコンづくり、通いやマウドづくりや、通いや者の所属しているグループの活動、通いや者が住んでいる住宅地とその近傍集落の住宅地についての取材結果を報告します。併せてそのグループが行っている集落活動についても記述します。

(1) 通いやーコンづくり

通いや者：Fさんは所属のグループのメンバーと共に、2008年から植木集落の東約800mほどの所にある、約10アールの畑を借地してやーコンづくりを行っています。観光パンフレット「ここは遊心の理想郷 山古志」に、名産品として「野葱：山古志の土はやーコン栽培に最適。ほのかな甘みと抜群の歯ごたえ」と紹介されて、一部の人にはよく知られた野菜（根菜）のやーコンですが、フリーの百科辞典には「南米原産のキク科の多年生草本」^{註3)}と説明されています。おもてに出てくる栽培時の作業の主なもの、おおむね6月頃の苗の植え付け、7月頃と9月頃の草取り、11月の収穫となりますが、野ネズミの食害があったり、モグラの影響があったりで容易ではないようです。下ごしらえ作業では、収穫に際しては次の年の為の種株の選定と冬期間の屋内での保存、春になってからは育苗、5月の山菜シーズン終了の頃から旧株撤去、肥やし（こやし）くれ、畑土耕起、そして畝立て作業があります。これが終わってから6月頃の苗の植え付け作業へと続きます。筆者は2008年度の草取りと収穫、2009年度の畝立てと草取り、2010年度の苗の植え付け、という内容で連続していない作業体験でした。それでも下ごしらえを除いて一連の流れがわかるころまでには到達しました。やーコンの葉は乾燥させてお茶にして「やーコン茶」として農産物直売所などでも販売されています。余談ですが山古志では、「こやしくれ」のように、畑に肥料を「撒いたり、与えたりすること」を「くれ」といいます、同様に鯉や牛に餌を与える場合「餌くれ」とい

います。筆者の想像ですが、これは「くれてやる」から来ていると思われ、「下さい」ではないと考えられました。使われている言葉がわかると、会話のやりとりと共に地域への理解が深くなると考えられます。通いや者：Fさんがおおむね栽培指導をする形ですが、通いや者：Gさんもその栽培技術には蘊蓄が深く、やりとりが非常におもしろかった印象があります。通いや者：Hさんは、2010年に初めてお会いしました。苗の植え付けはこの3人と地元の人が5人ほど参加して進められました。作業の休憩時間に地元情報が得られないかと考えていましたが、休むことが重要で、あまり詳細なことまでは聞取りできません、この点が単数による調査の欠点です。欲をいえばさきがありませんが、当方も含めて若者ないし壮年者の作業への勧誘が必要だと痛感しています。それでも毎年継続していて、かなりがんばっている印象です。住んでいる町内の各種の行事や予定があると思いますが、その中にこの通いやの作業を組みこんで栽培を続けていることは、相当な情熱、思いをもっているものと思いました。このやーコン畑の近くには、通いや者：Fさんの所有している畑があり、グループでのやーコンづくりとは別に野菜を栽培していますが、被災後に旧村から転居したFさんは、時々出勤前の早朝、栽培した作物の見回り、そのほか時期に応じて土曜・日曜・祝日にも手入れ等で通っています。もともとは山古志地域外へ勤務していたこともあり、兼業農家であったので早朝の手入れは苦でなかったそうです。作目はソバ、カグラナンバン、キュウリ、アサツキ、ナスなどですが、その年によって変化もつけているそうです、作物栽培は好きだったので工夫して作付けしたり、草取りなどの農地管理はずっと続けているそうです。趣味は多彩で「釣り」、「山菜取り」、「キノコ取り」などで多忙だそうですが、その合間をぬっての作業となるわけで、やはり好きでないと続けることはできないと考えられます、しかし好きだからだけではないものがあると推察されました。

このグループのメンバーは非常に精力的な活動をしています、2009年からはヤマウドづくりも始めてい

ます。この山菜は、ウコギ科タラノキ属の多年草ですが、山古志地域内ではあちらこちらに自生しています。地下室などの暗闇で発芽させたものを（軟白）ウド、野生のものをヤマウドといているようです。天婦羅、酢味噌あえ、キンピラ等で食されます。通い者：Gさんは、このヤマウドに強い思いをもっていて、その思いから始まったヤマウド山菜園ですが、2009年度は山古志闘牛場の近くの畑で始まり、2010年度は池谷集落の北にある畑で開園され、6月上旬には苗の植え付けが行われました。新潟市から来たというご夫婦が参加、筆者も参加、新聞記者の取材とにぎやかな中で、メンバー以外も含めて植え付け作業は進められました。苗が根付いた後は、毎年その新芽を楽しむことができますので、場所を探して、順次植え付けを拡げていくことで、その部分の手入れ・管理が進み来訪者を案内することができます。この山菜園事業は始まったばかりですが、グループのメンバーは継続していく意欲がありますので、この山菜園ポイントをつないでいく方法で点から線につながり、手入れ等の実効があがってくると考えられました。このヤマウドづくりの山菜園事業は、春の山菜まつりの後に、苗の植え付け作業になりますので、山菜まつりの時に広報して参加者を募集したうえで連続行事とする方法が考えられました。ヤマウド等山菜の観察・昼食時の味わい、その後に次年度等につながる植え付けと栽培、循環の理解にもつながる行事になります。野菜のヤーコンづくり、山菜のヤマウドづくりの事例から、通いで野菜等の栽培、通いで行事運営の一部を報告したところですが、前述の通い者3人は同じグループに所属して、帰村したほかのメンバーと共に「ふるさと」を元気にする諸活動を行っています。活動の背景には生まれて育ったこの「ふるさと」への強い愛着があって、共に活動を進めていると考えられました。

(2) 通い者の3人が所属するグループ

前節に登場した3人が所属しているグループは、

NPO法人「よしたー山古志」であり、有名な法人ですので多方面に登場しています。図書「よしたー山古志編（2006）「帰ろう山古志へ」、新潟日報事業社」もそのひとつですが、「（新潟県中越地震）山古志住民自らが体験した感想を記録として残したもの：92名の執筆」という内容になっていて、法人のメンバーによる体験談も記載されています。そのほかに関しては関連のURL等からの引用でその概要を記述します^{注4}。「特定非営利活動法人 よしたー山古志」、事務局長：川上 巖、代表者：五十嵐良一、理事：6名、会員数：22名、設立：2006年11月（2007年5月認証）、事業内容：①特産品の企画・提案事業、②人材育成（学習・啓蒙）事業、③地域外交流促進事業、④資源保全事業と紹介されています。設立趣意書に「村おこし活動」に25年前から取り組んできたことが示されていますが、2006年の25年前ですと1981年になり、宮本常一の1978年の講演から約3年後の頃から村おこし活動を始めた模様です。再確認の予定ですがあの山古志の地形模型を作った「ほおきんとお」がその前身と聞きましたが、「ほうきんと

表3 よしたー山古志の主な活動（2007年～2010年）

年度	主な活動
2007年	7月 NPO認証記念講演会、ヤーコン栽培・草取り
	9月 歌声交流コンサート（ともしび）
	10月 ありがとうまつり（キノコまつり）、ヤーコンサミット参加、
	11月 ヤーコン収穫など
2008年	3月 地域復興交流会議
	5月 山古志春の山菜まつり
	6月 ヤーコン植え付け
	10月 秋の山古志キノコまつり、山古志ウオークガイドボランティア
11月 ヤーコン収穫、山古志産業まつり出店など	
2009年	3月 古志の火まつり出店
	4月 ヤマウド山菜園畑整備
	5月 山古志春の山菜まつり、ヤーコン植え付け
	10月 秋の山古志キノコまつり
	11月 ヤーコン収穫、山古志産業まつり出店など
2010年	3月 中越じまん市参加、古志の火まつり出店
	5月 山古志春の山菜まつり
	6月 ヤマウド山菜園植え付け及びヤーコン植え付け
	10月 うたごえ喫茶ともしび in 山古志
	11月 ヤーコン収穫、山古志産業まつり出店など

お」とはフキノトウのことだそうですが、これは山古志サテライトの人に聞きました。なお、「よしたー」とは牛の角突きの際に勢子が発する掛声で「よっしゃー、よっしゃー」と同じ用法とのこと。会員22名のなかには、新潟市北区在住の人もいました。理事6名のうち、地域外へ転居した3名が前節で紹介した、通い者：Fさん、Gさん、Hさんの方々ですが、この「よしたー山古志」のグループ全体活動と共にヤーコンづくり、ヤマウドづくり、などの野菜・山菜栽培を行っていますのでその多彩な活動ぶりには驚きます。今後、「ほうきんとお」について「山古志村史・通史編」に記述されている事項以外のことや、設立当時のことなどを聞き取りしたいと思っています。

また、最近の活動概要のポイントは表3のとおりです。

以上の活動の内、グループによる野菜等栽培の活動は収穫も目的にしていると同時に、畑等の手入れ・管理にも及び、地域外との交流促進、(農村・農産物を含めた)資源保全にわたっています。理事同士を通じて旧村(山古志地域)内とも交流を進め、特に地域行事、地域での催事(イベント)に際してはこれに参加する転居者・来訪者も含めた活動の展開に大きく寄与し、「地域づくり」活動の実践となっています。転居した3人はそれを穏やかに示していました。近距離からの通い者：Fさん、及びHさんの住む場所の確認は、通いの実行、継続の背景を理解する上で必要と考えられました。

(3) 通い者の住む住宅団地とその住宅

旧村から転居した通い者：FさんとHさんの住む住宅団地は、長岡市山古志支所から直線で10kmの圏内にあります。JR上越線と国道17号線の西側にある旧集落に隣接して新しく造成されたところです。ここから山古志支所までは車で約15分から20分程度の所要時間です、またJR長岡駅へは車でほぼ同じ位の時間です、旧村と長岡駅のほぼ中間にあるという住宅地なので、通いのヤーコンづくり、ヤマウドづくりなどの野菜等栽培が可能となっていると考えられます。栽培

時には当然畑や農道の手入れ・管理も含まれてきますので、これらの諸作業を含んだものとして栽培と表記します。

様々な事情があつて苦渋の選択として転居を決断した際、この住宅地が敷地の対象となり、旧山古志村からもかなりの世帯(約15世帯)が転居しました。平成17年9月に造成が完了しており開発区域は約3haです、(用途：一戸建形式の専用住宅)の宅地で、区画数は約65区画、宅地割合が約65%、一区画の面積は平均で約300㎡程度で、区域内には道路、上・下水道、公園、ごみ置場、消火栓が附置されています。

区域の中央及び西側外周には南北方向に幅員8mの道路、東西方向にも中央と北・南外周に幅員8mの道路があり、その他内部に6m道路があります。市街化調整区域内ですが地区計画が決定されており、そのおおまかな条件は、(建ぺい率：50%、容積率：80%、外壁の後退距離：1.5m、等)でかなり厳しいものと考えられました。あまり遠くない場所には仮設住宅用地として使用され、現在は工場が立地している工業団地があります。新しく造成された住宅団地の概要は以上のとおりですが、2010年10月現在、若干空き地はあるものの、全体的にはほとんど住宅が建築されています。住宅地としての特徴の第一は、隣接既存集落及び国道17号線からのアクセス(接近性)上、東西方向の道路がもう1本あると往来が良くなるのではないかと考えられました。第二は隣接既存集落の神社が近くにあり、行事などで相手からの参拝が可能になると思われましたが、残念ながらその利用の詳細までは不明です。第三は送電線の鉄塔があり、その近くには大きな調整池がありますが、スポーツ用に利用できそうな広さがありました。第四は西側に広大な畑地が広がっていますので、家庭菜園で不十分な場合は借地等で利用が可能と考えられました。第五になりますが、観察したところでは隣接既存集落とよく馴染んでいる印象がありました。このあたりの造成地は、住宅地図で確認しますと既存集落に沿った形のものが多くみられ、その為おさまりによく立地していました。

この住宅団地には山古志地域外から転居された世帯も多く、約65区画の敷地のなかで各地域からの転居者が混在している模様でした。なお仮設住宅の時代からの繋がりもあって、住宅団地中央には定期的に移動販売車が回ってきて、食料品を中心とした販売をおこない、団地居住者の利便に貢献しています。この移動販売の経営者は小千谷市在住で、かつては陽光台の仮設住宅団地をまわり、現在も山古志地域内を巡回して販売していますので、地域と各集落の重要な供給のラインになっています。この巡回する移動販売の点から、この住宅団地は旧村外にある飛地集落の印象がありました。経営者のお話では、「販売上も年々高齢化の影響は強くなっている、場合によっては販売品の運搬もあります」とのことでした。

2008年当時の巡回頻度は、毎週2回で曜日を設定して行っていました、近接する長岡市川口地域も対象地としているそうですが、対象地を比べると1ヵ所当たりの滞在時間に影響するなどのジレンマが想像されました。この住宅団地は、地震後の大変な時期での工事でも多くの困難があったものと想像されますが、2010年11月現在では落ち着いた佇まいとなり5年の歳月の経過を強く感じました。なお、通い者：Gさんが住んでいる所はこの住宅団地から北の方向へ約7kmほど長岡駅寄りになることと、視察をしていないことから住宅地等の記述はしていません。筆者の場合、住宅等の外観目視観察の時、短時間で通過する機会が多いので、メモをとる場合は別として、おおまかな観察となってしまう事後の報告メモ作成の時に困ることが多いのですが、その作成時に気が付いた項目は下記の通りです。[敷地利用、建物概要の把握のポイント]、(ア) 家庭菜園、(イ) 樹木植栽、(ウ) 融雪池等、(エ) 生簀等、(オ) 主屋と車庫棟、(カ) 主屋の階数、(キ) 屋根雪対応方式、(ク) 生垣・門塀、(ケ) その他。

旧山古志村の住宅を外観目視観察した際、これらを確認することでその特徴の把握を進めました、この住宅団地の外観目視の場合も同様にして進めました。建物内部については特別な場合を除いては内部観察は行

わず、もっぱら外部の観察に集中しました。従って以下の住宅に関する記述は、団地内の住宅のおおまかな印象記録程度のメモであり、符号も先の人物との関連はないことを予めおことわりします。

(住宅01)は、建物の回りに家庭菜園があり、樹木植栽、融雪池や生簀等はなく、主屋に車庫が組み込まれた3階建て、屋根雪対応は自然落雪方式の雪下ろし不要型です。生垣・門塀が無く、広い家庭菜園が特徴的ですが、市街化調整区域内の地区計画の条件も影響したものと考えられました。【仮称：家庭菜園重視型】。このスタイルが多いと思われます。(住宅02)は、樹木植栽、融雪池や生簀等はなく、主屋に車庫が組み込まれた3階建て、屋根雪対応は自然落雪方式の雪下ろし不要型。家庭菜園を少なくして、車庫前の空地を大きくとり、生垣・門塀はなく、その分を駐車スペースとしての利用を重視した計画と理解されました。【仮称：駐車スペース重視型】。こちらも多数見ることができました。

(住宅03)は、3階建て、屋根雪対応は自然落雪方式。建物それ自体が広い為、樹木植栽、融雪池や生簀等はなく、家庭菜園もほとんどとらず、別置車庫となっています。採光に工夫した平面構成となっていました。【仮称：特別条件型】。

以上は、家庭菜園の存在に注目して観察していたものですが、多くの住宅でこの存在が確認されました。今回の添付写真の家庭菜園は、その代表的なもののひとつです。もともと野菜は自給的に栽培していた習慣があったこと、地区計画の条件もあったことなどにより、顕著に存在したものと考えられます。実際の栽培時期に見学させてもらうと良くわかりますが、この家庭菜園を重視した建築計画は、市街地で住宅計画を進める際においても、敷地利用上重要な視点を与えてくれるものと考えられました。以上の記述は、観察記録メモ程度の内容ですが、団地の位置、急がれた住宅再建、転居者の存在、家庭菜園があって旧村の雰囲気を残している佇まいなど、この住宅団地についての断片的な記録にとどまるとしても、ぜひ記録に残しておきたいということがこの報告の出発点にあります。この住宅

団地は旧村外にある飛地集落の側面があります、また公的な記録はないと想像されますので、本稿において若干記録を残すという点から記述を進めます。この団地内の住宅の特徴を大まかに述べるとすれば、「おおむね家庭菜園をもち樹木植栽のすくない、自然落雪方式の車庫組み込み型の3階建住宅が多い」と言えると思います。住宅の「平面の型」としては、外観目視からのコメントですが、いわゆる「魚沼型」民家の平面は全く見られません。その片鱗などが無いものか探しましたが見られません。筆者の推測ですが敷地の形状、特に間口よりも奥行きが長い敷地では、縦長の平面になりがちで横長の平面は殆どありません。この団地の住宅と旧村に新築された住宅とを比較することで、旧村での敷地条件、土地利用の特徴など一面が明らかにされるのではないかと、この比較作業にも期待をしています。またこの住宅団地の西方向のそう遠くない所に既存の集落がありますが、その集落内の住宅地を「近傍集落の住宅地」と仮に称し次節で記述します。

(4) 近傍集落の住宅地

前節で報告した住宅団地から3km圏内の既存集落内にも転居した人達の住宅地がありますので、これらを「近傍集落の住宅地」と仮称して報告します。

(住宅04)は、近傍住宅地で既存集落内の敷地に立地した住宅です。家庭菜園、樹木植栽があり、融雪池生簀等はありません、主屋は2階建で屋根雪対応方式は雪下ろし式。その他の特徴としては道路に2面で接していて、集落内の旧道と近年になって開通したバイパス的な新道に挟まれた敷地です。家庭菜園の作目は多種類でした、こちらのお宅には2008年2月に聞き取りをさせていただきました。ご主人は業務で旧村に通い、従前地の集落行事にも参加しているとのことでした。住宅全体は和風の雰囲気をもつ外観で、平面的には座敷を持つ田の字型となっています、魚沼型ではないにしても民家型の流れを持つ平面形式の住宅で、あらたまった時の接客空間である座敷が居間の横方向にあるた

め、全体が横長型の構成となっていました。[坊垣和明(2008)]^{注5)}によれば、「屋根の雪が落ちて出入口を塞ぐ。出入口に切り妻の小屋根を架ければ、雪が出入口の目の前に落ちるのを防ぐことができる。それを建築的に解決したのが『中門造り』である。直屋(すごや)に切妻の棟を張り出し、L字型の平面を持つ民家形式である。張り出した棟には、厩(うまや)などが設けられる。平面的には『曲屋』と類似する。」とありますが、玄関出入口も含めてこれを継承していると思われました。敷地にはこの横長型建物を配置し、新しく植栽された樹木を庭の中心とする建築計画としています。2010年になってそれまで野菜が栽培されていた広い部分には、隣家としての住宅が新築されましたが、その着工まではその部分も含めて畑地としての、土地利用がされていました。

(住宅05)も、近傍住宅地で既存集落内の敷地に立地した住宅です。家庭菜園、樹木植栽もありますが、融雪池生簀等はありません、主屋と車庫棟は別棟で主屋は3階建、屋根雪自然落下方式です。機会があれば面接取材をお願いしたいと思いましたが、残念ながらそれは実現できませんでした。その他としては、前記の住宅と同様で集落内の旧道と新道に挟まれた敷地が特徴となっています。(住宅06)も、近傍住宅地で既存集落内の敷地に建った住宅です。家庭菜園も樹木植栽もあります、融雪池生簀はありません、主屋と車庫棟は別棟で主屋は2階建、屋根雪自然落下方式です。集落内を通る幹線道路を前面道路として、空いていた敷地を選んで立地した模様でした。こちらも面接取材はできませんでしたが、よく注意して観察してみると、従前の住宅地とそこの土地利用が想像される佇まいで、端的に表現すれば山古志的な雰囲気をもった住宅敷地となっており、間口よりも奥行きのある敷地の為、縦長型の平面とした住宅でした。以上の場合には近傍住宅地の既存集落内の敷地に立地した転居者の住宅ですが、新たに樹木の植栽などもあり説明を受けなければ、集落内のほかの住宅と見分けが付きません、現在ではそれほど周囲の建物にしっかりとけ込んだ佇まいを示し

ていました。

4. 山古志へ通うこと

本章では、2、3章で報告しました通い耕作の事例を踏まえて、通い耕作の意味を再考します。特に、なぜ通い耕作者は山古志地域に通うのか、通い耕作は山古志地域の農業を支える耕作方式になりうるのか、について考察を加えます。

(1) 通い耕作という暮らし方と耕作方式

1) 通い耕作という暮らし方

ここでは2章のヒアリング調査の結果を踏まえて、通い耕作の意味を再考します。通い耕作者から話を伺い、通い耕作は1つの暮らし方ではないかと考えるようになりました。前述のように、通い耕作者は山古志地域で耕作しているだけではなく、また耕作することのみを目的に山古志に通っているわけではないからです。通い耕作者の全員が慣れ親しんだ山古志地域の行事への懐かしさを感じています。今回のインタビューで通い耕作者の暮らしの全てを汲み取ることはできていませんが、一部の断片的な言葉からそれぞれの山古志に対する思いを伺うことができました。通い耕作の主目的が米や野菜を栽培・収穫することには変わりありませんが、そのプロセスにある共同作業や年中行事、日々通う中でのお茶飲みやゲートボールをして時間を過ごすことも、山古志に通う大きな目的ではないでしょうか。通い耕作は、旧村民が自らの生まれ育った山古志で暮らすことであると考えられます。

2) 通い耕作という集落における耕作方式の可能性

さらに、通い耕作の実態をみますと、耕作者の年齢にもよりますが、ほぼ毎日山古志に通って農作業をすることが可能であることがわかります。また、通い耕

作者は道普請などの共同作業に参加しています。中山間地で農業をするために共同作業は不可欠ですが、担い手が減少している集落にとって通い耕作者は共同作業の貴重な担い手の1人といえます。今回の調査から、山古志地域では通い耕作が集落における耕作方式として存在していることを確認することができました。以上より、通い耕作は集落における農地の維持管理を可能にし、さらには通い耕作が集落空間の維持管理を補完する役割も期待されます。ただし、農作業の全てを通い耕作者だけでこなすことはできません。田植えや草刈りなどの人手を要する作業は家族で行なう、あるいは集落の若い世代や営農組合に委託しています。こういった実情に則した耕作方式として、通い耕作の可能性を検討していく必要があります。3章の通いやコンづくりのように、通い耕作者と山古志地域内の住民との組織化された共同作業は重要な参考にするべき事例です。

(2) 通い者の思いと地元での展開

1) 通い者の思い

旧山古志村民による通いでのヤーコンづくり等について、その動機や思いに関しては、面談やその後の調査で、「生まれ育った『故郷（ふるさと）』を大切にしたい、元気にしたい」という「通い者の思い」が徐々にわかってきました。多少照れる部分もあるかもしれませんが、こういう思いが「通い」のバックボーンとなって、継続につながっていることがよくわかりました。この「思い」は現在そこに住んでいる地元の人にも共通するものであることは、容易に想像されます。土地の耕作、作物の栽培ができる山古志地域の農地はその生産が十分に可能な土地なので、アップダウン等で作業に困難があるとしても、生産力のある農地でもあると考えられます。取材で判明しましたが、通い者の住宅地には家庭菜園はありましたが、池・生簀はありません、このことから地域に残された農地はなんとか

利用したいという気持ちも想像されました。収穫に伴う管理も付随しますが、恵みが主体となる山地の管理とは違った、創意工夫や栽培技術が大きく影響する農地の管理は、地元の人、通い者、来訪者からの働き掛けが求められていると思います。山地と農地との境界部分あるいは融合部分は、自然地部分と人工地部分のそれぞれの土地にふさわしい植物の生育が見学できるので、観察する人の興味が湧いてくる場所でもあります。現在はまだ「点」状態の「ヤーコン畑」、「ヤマウド山菜園」づくりの活動は、通い者、地元の人々の強い「思い」によって、今後は「通いによる作物等の栽培事業」へさらに展開することが期待されました。

2) 地元での展開

三ヶ地区（南平地区）の池谷集落には「集落営農」の農業機械や車両の収容施設、等高線型区画による復旧水田、多種類作付型畑地、ぼっちゃんカボチャ畑、造成された住宅団地：「天空の郷」近くのカグラナンパン畑、ヤマイモ栽培畑などがあります。大久保集落には集落入口の駐車場と案内板、3戸連続型の公営住宅などがあり、榎木集落には「涸れない給水口」などもあります。これらの地点（ポイント）を組み合わせた「集落内遊歩ツアー」のような企画・アイデアが考えられましたが、通い者と地区の人々との協働での実施計画案を期待しています。ぼっちゃんカボチャの関連で、最近流行のきざしを見せている、「①ミニ野菜栽培」のアイデアも浮かびました、こういう野菜であれば1個の重量や体積が小さいので扱い易く、消費者にとってもカット野菜でない楽しみがあると考えられます。大規模耕作地での栽培に対するものとして発想できるのではないかと思います。これは都市部での小規模な畑栽培にも向いていると考えられますので、共通する作目となり、条件的な相違は、日照時間や栽培期間などになり、技術上の情報交換と交流にもつながると考えられます。山古志地域では、集落毎に作物の採種を行う習慣もある模様です、限られた愛着のあるものに限定

されているかもしれませんが、そういう習慣の延長で、「②採種と種分け」なども考えられます。例えばミニ野菜の、ミニ白菜、ミニ大根、ミニ人参、坊ちゃんカボチャなどの種を採種して、希望者へ分けてやることですが、個人的には実行されているかもしれません。このアイデアのポイントは、種を収穫物とする方法です。「③キノコ販売」、キノコは天候によって2010年のように豊作の時もあれば、そうでない不作の時もありますので、天然ものの採取では変動がありすぎるかもしれませんが、雪の時期を除いた期間の栽培も有望と考えられました、もはや実行されているかもしれません。畜産業で肉牛飼育も盛んな地区もある訳ですが、いわゆる厩肥と堆肥を利用して、「④完熟堆肥」の製造も浮かびました。販売ルートに関しては、収穫された野菜や山菜を、例えば国道の沿道で広い駐車場のある場所での臨時的な店舗で販売したり、また市街地の住宅団地にある直売型店舗での販売もあると考えられました、これらは山古志地域内での販売ルートとは別建てで企画したのですが、いくなれば「⑤近接市街地販売」もあると思われました。収穫の多寡によって欠品の場合もあることを相互に納得しておく方法も考えられました。過去に検討したとの声もありそうですが、実行者の問題やその他の事情で実現までに行かないものもあったと考えられますが、アイデアを発想し、可能性を検討して、見込みがありそうなものの実行を期待しています。以上の記述の内容は、交流事業とも関連すると考えられますが、「点から線の状態」を創出することを期待しての記述です。

この通い者を含めた「よしたー山古志」の野菜・山菜づくり活動は、3ヶ年以上にわたって継続し、同時に畑地・農道等の手入れ・管理も行い、地域外に居住していても地域内の人達との協働で、ムラ仕事を含む集落活動や集落行事を進めたことが十分に理解できました。筆者が取材をした、ヤーコンづくり・ヤマウドづくりが行われている地区は、池谷、大久保、榎木の3集落で構成されている三ヶ地区（南平地区）ですが、この集落は地震の被害が特に甚大だった6集落に含ま

れています。被害が甚大だった事情もあって転居を余儀なくされた世帯も多かったわけですが、それでも復旧と復興の過程で転居者の通いによる働きかけや集落行事などへの参加があり、往来の足が確保されればその回数を増やしたいという声も聞かれました。潜在的な通い希望が実現されると、徐々にその通い希望が通い活動に転換していくと考えられます。この潜在的な通い希望を取り入れることや、交流事業による来訪者に協力等を依頼することによって、「通いによる作物の栽培事業」、さらには「通いによる集落行事や活動への参加」とその対象が展開していくことが考えられます。通い者は住んでいる場所の町内会活動等の都合で、「通い」に困難もあると思われませんが、従前住んでいた集落の人達からは、知人として歓迎されその通いを期待されている面もありました。それが通い者に通じて、いわゆる励みとなっていることも聞きました。2010年5月の「春の山菜まつり」は、池谷集落の山古志闘牛場を主会場として開催され、通い者が所属するグループ「よしたー山古志」が主催（各集落が共催だった模様）でしたが、開会式では地元の池谷区長の青木幸七さんから挨拶がありました、この挨拶からも山古志地域内外の人が、地区の行事でもあるこの山菜まつりを盛り上げていることがよく理解できました。

（3）山古志地域外縁からの通いの可能性

1) 山古志地域の世帯数等の推移など

山古志地域の世帯数等の推移に関しては、「山古志支所だより：2010年12月号」及び「岩野邦康（2010）」^{注6)}に詳しく報告されていますので、そこから一部を引用します。2010年12月1日現在、①世帯数：485、②人口：1,303人です。遡って2000年では、①世帯数：700、②人口：2,222人。1990年では、①世帯数：822、②人口：2,867人。1980年では、①世帯数：927、②人口：3,508人。1970年では、①世帯数：1,007、②人口：4,446人でした。各所でもいわれていますが減少の傾向です。集落別の

世帯数については、[中野泰（2010）]^{注7)}の「表3. 集落別世帯数の動態」に明示されていますが、この表によれば2009年4月現在、100世帯を越える集落は「種芋原」と「虫亀」の2集落で、そのほかの12集落の世帯数は幅があって、65から6となっっています。このなかで2005年9月と2009年4月の世帯数と比較して、減少率が30%を超える集落は池谷を始めとした7集落でした、これらの集落では30%を超える転居世帯がいたことになります。減少率を別としても、14集落のそれぞれに転居者があったわけですがそこからの「通い者」があれば、集落に残った人からは相当程度に期待されると思われる。そして長岡市内、小千谷市内などの比較的近い場所に転居した場合、「通い」という視点からは、その一帯は山古志地域外縁あるいは（山古志の）山村裾野居住圏とも考えられます。

2) 山村裾野居住圏からの通い

山古志地域に居住して長岡市内や小千谷市内へ業務や仕事で通勤している生活スタイルの場合、「山村居住」と呼ばれています。これに関連して山古志地域外縁に居住して、通いによって同地域内で耕作、栽培等を行う場合の生活スタイルは、「(仮称)山村裾野居住」が適しているのではないかと考えられます。実際上は(仮称)を省略して、そのスタイルを山村裾野居住と称した場合、『山古志へ通うこと』は、世帯数が減少した集落の旧村民にとっても、山村裾野居住している〔ふるさとを思う〕通い者にとっても、相方の協働による集落諸活動継続の可能性と考えることができました。

3) 通い耕作者を包摂する仕組み

1章の図1に示しましたように、通い耕作の事例は長岡市や小千谷市に居住する都市住民が通い耕作を行い、山古志地域における集落の維持管理に参加する可能性を示唆しています。また、2章に記述しましたように、通い耕作は山古志地域に居住する1つの形であると考え

られます。そして、通い耕作者が集落の共同作業に参加していることを踏まえ、この居住形態は山古志地域における集落の維持管理システムを支えるものとして評価できます。現在全国各地で都市農村交流という理念の下、棚田オーナー制度や滞在型市民農園といった仕組みを活用した農地の維持管理が試みられています。通い耕作も同様に、しかしより実際に都市居住者が農村を支える仕組みとなりえると考えられます。ただし、通い耕作を山古志地域における集落の維持管理システムに昇華させるためにはいくつかの課題があります。例えば、平日就業している若年層や中年層が山古志地域に通い、耕作することを想定した場合、週数回の通い耕作で農地を維持管理しなければなりません。この場合、山古志地域内の集落や営農組合との協力、通い耕作者間の協力は欠かせないと考えられます。また、耕作に必要な農耕機械を山古志地域内に維持しなければなりません。そのためには、通い耕作の拠点となる施設が必要になります。長い目で見れば、農耕機械を共同で購入、保有、使用することが効果的になるかもしれません。こういった、集落を維持管理するための代替案を山古志地域の実情に合わせた形で模索することが今後の課題となります。

5. まとめ

本稿では旧山古志村民による通い耕作について、通い耕作者へのヒアリング調査と通いヤーコンづくり者への取材に基づいて報告しました。最後に2つの調査結果を踏まえて、今後の課題をまとめます。

ここまで繰り返したように、通い耕作は山古志地域における集落の維持管理システムに貢献していますし、今後も継続していくことが期待されます。そして、そのためには通い耕作者を集落に、通い耕作を集落の維持管理に、積極的に包摂する仕組みが必要であることを前章で述べました。その構築を視野に入れた場合、震災以前から続く営農のための組織と仕組み、震災・帰村後に形成された組織と仕組み、2009年の農地法改

正以降に形成された組織と仕組みなどの現状を把握し、これら既存システムとの関係の中で実現可能な新たな営農や居住の形態を模索することになります。

以上を「仕組みの領域」として考えた場合、このほかに「(地元) 活動の領域」も考えられます、この分野では旧山古志村民でもある、転居者の「通い」への思いは「生まれ育った『故郷 (ふるさと)』を大切にしたい、元気にしたい」という、ところにありました。長岡市山古志地域の関連する事項を再確認すると、現在の世帯数や人口は帰村式後から微減の状態です。地域の人口にかかわらず「経済の活性化」は課題のひとつでもあると考えられますが、地元の活動を地区レベルでみますと、本稿の「ヤーコンづくり」では三ヶ地区(南平地区)での「通い」の事例報告が中心になりました。

同じように被災後に世帯数が大きく減少した竹沢地区：油夫集落、東竹沢地区：木籠・梶金集落及び小松倉集落などの、集落を単位とした事例報告等も重要な項目です。同時に転居者による都市部等への「発信」や「仲介」が想定され、都市部と山村部との中間に位置する場所性からそこに着目した「交流と連携」の関連事業が視野に入ってくると考えられます。交流上は来訪者や山古志ファンへの発信、連携上は産地と消費者とを結ぶ仲介、そして転居者同志をゆるくつなぐ、例えば「仮称：〇〇山古志会」などの横断的なネットワークに関する事例報告等も同様な項目になります。

以上が、今後の「通い」に関する研究課題であり、本研究グループの研究課題でもあります。

【謝 辞】

2009年8月のヒアリングの準備と当日の調査協力、それ以前の2007年度及びそれ以降の調査取材協力など、2010年度の本稿をまとめるまでに、取材・聞き取りなどで多くの方々にご協力をいただきました。またお世話になりました。個々にお名前はあげていませんが、記してお礼を申し上げます、同時に感謝を申し上げます。

【注】

注1) 詳細は参考文献 14) を参照ください。

注2) 転居：一般には、「ひっこし」とされています。同じような意味を表す言葉として「移住：よその土地にうつり住むこと」とありますが、ある地域からの関係性や距離の遠近を問わない点から転居という言葉を使用しています。

注3) ヤーコン - Wikipedia : <http://ja.wikipedia.org/>.

注4) (NPOよしたー山古志 : <http://yoshita-yamakoshi.com>).
(山古志ふぁん倶楽部 : <http://yamakoshifan.com>).

注5) 坊垣和明著 (2008) 「民家のしくみ」学芸出版社.

注6) 岩野邦康 (2010) 「墓から見た帰村」[(新潟歴史博物館主任研究員) 陳 玲編「中越地震後の山古志への『帰村』に関する民俗学的研究」], pp55-62.

注7) 中野泰 (2010) 「『集落再生』を支える社会関係とその現在」[前掲書], pp29-46.

なおこの「前掲書」の、陳 玲 (2010) 「仮設から始まった生活の再生」において、山古志ボランティアセンターの活動についての詳細な報告がありました。

(助新住宅普及会 住宅建築研究所).

- 9) 深澤大輔編 (1984) 「豪雪地帯農村住宅の“無文字性”の成文化に関する調査研究」, (助新住宅普及会 住宅建築研究所).
- 10) 新潟県教育委員会編 (1998) 「日本の民家調査報告書集成 第7巻中部地方の民家 1 新潟」, 東洋書林.
- 11) OECD編著 (2010) 「社会的企業の主流化」明石書店.
- 12) 長谷川順一著 (2009) 「地震被災建物 修復の道しるべ」住まい空間研究所.
- 13) 仁瓶俊介 (2007年度) 「山古志地域の住宅目視報告」私家版.
- 14) 明峯哲夫 (2009) 「山古志の農業 (第2報)」, 『平成20年度東洋大学福祉社会開発研究センター研究概要 研究プロジェクト2』, pp11-20.
- 15) 内田雄造・古山周太郎・清野隆 (2009) 「震災前後の山古志地区の営農の状況と仮設住宅での農作業の実態」, 『平成20年度東洋大学福祉社会開発研究センター研究概要 研究プロジェクト2』, pp82-96

【参考文献】

- 1) よしたー山古志編 (2006) 「帰ろう山古志へ」新潟日報事業社.
- 2) 里村洋子著・写真:中條均紀 (2006) 「動き出す山古志の衆」, アートヴィレッジ.
- 3) 長島忠美・石川拓治著 (2007) 「国会議員村長」小学館.
- 4) 三宅雅子著 (2006) 「掘るまいかー山古志村に生きる」鳥影社.
- 5) 磯部定治著 (1999) 「手掘隧道物語」(とき選書) 新潟日報事業社.
- 6) 松井克浩著 (2008) 「中越地震の記憶」高志書院.
- 7) 青木義脩・毛利和夫編著 (2001) 「民家と町並み」山川出版社.
- 8) 鈴木成文編 (1987) 「住居における対社会性の変遷と構造」,

*写真編 (その1)



写真01) 2009年09月撮影
榎木集落：ヤーコン畑



写真04) 2010年05月撮影
池谷集落：ヤマウド山菜園



写真02) 2009年05月撮影
榎木集落：ヤーコン畑



写真05) 2010年10月撮影
池谷集落：ヤマウド山菜園



写真03) 2010年05月撮影
山古志闘牛場周囲のブナ林



写真06) 2010年10月撮影
池谷集落：ヤマウド山菜園近くのハギ

*写真編 (その2)



写真07) 2009年10月撮影
池谷集落：体菜（タイナ）の畑



写真10) 2009年04月撮影
大久保集落：集落案内板 近景



写真08) 2009年10月撮影
池谷集落：体菜（タイナ）の近景



写真11) 2010年11月撮影
造成住宅団地：中央道路



写真09) 2009年04月撮影
大久保集落：集落案内板



写真12) 2010年11月撮影
造成住宅団地：東側道路

PROJECT 2

*写真編 (その3)



写真13) 2009年07月撮影
造成住宅団地：家庭菜園



写真16) 2010年11月撮影
近傍集落の住宅群



写真14) 2010年11月撮影
造成住宅団地：公園



写真17) 2010年11月撮影
近傍集落の住宅群



写真15) 2010年11月撮影
近傍集落の入り口部分



写真18) 2010年11月撮影
近傍集落の住宅群